

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和3年4月20日(火)

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立伊藤学園

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分類	2年			3年			4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	84.0	90.9	87.7	78.8	85.9	81.0	72.5	78.0	73.3	69.7	71.7	72.5	65.3	71.0	65.8
活用	58.8	63.4	56.8	56.3	52.6	54.4	59.4	60.4	60.1	56.3	61.9	57.4	52.5	67.9	55.0

2 具体的な課題とその要因

- 2年 活用問題において、「書く領域」の「メモをもとに文しょうをかく」記述問題のみ、目標値の40.0に対し正答率が31.4と大きく下回った。メモを基に文章を書くことに習熟していないことが原因と考える。
- 3年 活用問題において、「説明文」を読み取ること、説明する文章を書くことが目標値を下回った。「書く領域」の「メモをもとに文しょうをかく」記述問題では、全ての項目で正答率を大きく下回った。指定された長さで書いたり、自分の思いや考えを明確に書いたりすることに習熟していないことが原因と考える。
- 4年 「書く領域」の「調べたことを文章にまとめる」問題では、目標値42.5に対し正答率が30.5と目標値を大きく下回っている。文章を書く力が不足していることが原因だと考える。
- 5年 校内平均正答率は、目標値より上回っているが、基礎問題「書くこと」の「指定された長さ（文字数）で文章を書く」「2段落構成で文章を書く」の正答率は、目標値58.1に対して49.2と低い結果であった。これは、条件に合った作文を書くために条件を正確に把握することや自分の考えをもつ力が不足していることが原因だと考えられる。また、無回答での数値21.5も数値を下げている要因の一つである。
- 6年 「漢字を書く」問題において、目標値の58.3に対し正答率が54.1と下回った。漢字を書くことについて課題があることが分かる。タブレット等で読むことには慣れていているものの、文字を書く機会の絶対的な不足によって正答率が下回ってしまっていると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年 メモから文や文章に直す練習を日常に取り入れる。日記や自分の考えを書く場面を増やし、書くときに、助詞や接続語や用言の活用形等に注意して書くようポイントを示す。自分で書いた文や文章を推敲する時間を取り、よりよい表現や間違いに自ら気付く場面をつくる。学力調査のフォローアップ問題にも取り組み、問題の答え方にも慣れていく。
- 3年 経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、文章を書くことを日常に取り入れ、継続して指導していく。自分の考えを書く場面を増やしたり、相手に伝わるように事柄の順序に注意して書いたりするよう、視点を伝えてから書かせる。児童自ら推敲する時間を取るようになる。教師は書いた文章を添削し、書く力を向上させる。
- 4年 4年生は、国語だけではなく他教科においても、自分の意見や考えを記述させる活動を増やしたり、必要な情報から自分の考えを整理したりといった、文章の組み立てに気を付けて書く活動の場を増やしていく。
- 5年 「書くこと」の習熟を図るために書く活動を意図的に増やし、書くことへの抵抗感を減らす。日々の授業の中で、短い時間を使って様々な条件を提示し、3行日記・授業感想・短作文など工夫して文章を書く機会を設ける。
- 6年 漢字の書き取りの小テストを定期的に取り組ませ、漢字を書く機会を確実に増やしていく。また、同じ内容の小テストを繰り返し実施し漢字を書く力を定着させていく。漢字の学習を主とした単元での学習を丁寧に行うようにするなどして、第5学年までの漢字を確実に書けるように指導していく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年 全ての領域で、目標値や全国の正答率を上回るようにする。
- 3年 語と語や文と文との続き方に注意しながら文章を書く問題で、次年度は目標値を上回るように指導していく。
- 4年 「説明文を読み取る」「文章を書く」問題で、正答率が5ポイント以上上がるよう指導する。
- 5年 今年度目標値を下回った内容の、「情報の扱い方に関する事項」、「書くこと」、「調べたことを文章にまとめる」、「文章を書く」を、次年度は上回るように指導していく。
- 6年 全ての領域で、目標値や全国の正答率を上回るようにするために、無回答の数値を減らし「書くこと」の正答率を上げる。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	67.6	70.3	69.7	68.1	77.2	71.5	69.4	80.3	72.7
活用	67.0	76.5	74.4	55.7	64.4	58.0	50.7	65.5	53.1

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 領域別正答率では、情報の扱いや「書くこと」、「読むこと」が目標値に対して5ポイント以上上回っている。反面、言語文化に関する事項や言葉の特徴や使い方に関する事項はやや上回っている状況である。また、「話すこと・聞くこと」が目標値をやや下回った。ここから分析できることは、漢字の読み書きや語彙の定着に課題があること、人の話を集中して聴くことが普段からできていないことである。この2点については授業でも子どもたちは難しく印象がある。
- 8年** 領域別正答率では、全ての領域において目標値を上回っているが、特に「書くこと」「読むこと」においては10ポイント以上上回った。問題の内容別正答率を見ると、「漢字を書く」問題では目標値を上回ったのが4.1ポイントで他の問題に比べると上回った値が少なかった。日ごろの積み重ねによる言語事項の一層の定着を課題とする。
- 9年** 領域別正答率では、全ての領域において目標値を上回ったが、特に「書くこと」の領域では20ポイント近く上回った。その中で、「話すこと・聞くこと」の領域の「話し合いの内容を聞き取る」問題では、目標値を上回った値が7.7にとどまっている。表現したものについて活用する力を、より一層磨くことを課題とする。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年** 基礎的な語彙の獲得については、語句の意味を調べ、短文を書く活動をさらに取り入れていく。また、「漢字」の学習については、繰り返し反復練習を通して定着を図る。「話すこと・聞くこと」については、集中して話を聴くことや、自分の考えを整理してわかりやすく伝える活動をさらに取り入れていく。
- 8年** 「漢字」の学習において「書き」を重視した学習を行う。これまでも、継続的に漢字の学習を実施しているが、さらに定着度を上げるために様々な機会を捉えて反復学習を行っていく。
- 9年** 目的に応じて、自らの考えを積極的に伝えようとする意識、他者の考えを取り入れて自らの表現をより良いものにしようとする意識を一層高めていく。タブレットを利用し、スピーチを聞いて要約する学習や自らの発言やスピーチを記録し客観的に振り返る学習を、継続的に実施する。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年** 全ての領域、問題において、5ポイント以上目標値を上回ることを目指す。
- 8年** 今回目標値に至近であった領域や問題について、5ポイントほど上を校内目標値に定める。
- 9年** 全ての領域、問題において、10ポイント近く目標値を上回ることを目指す。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
 教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分類	4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	73.5	75.0	73.0	63.8	64.3	57.1	68.9	70.5	66.8
活用	58.9	69.5	61.9	52.1	51.2	46.1	52.0	58.4	49.6

2 具体的な課題とその要因

4年 ほとんどの大問において、正答率が目標値を上回る数値を示していた。しかし、「くらしの移り変わり」の問題では、目標値が85.0であるのに対し、正答率が72.6となっており、目標値を下回る結果であった。資料を読み取ることそのものはできていても、資料と資料を関連付けて考えることに慣れていなかったことが原因と思われる。

5年 おおまかな大問において、正答率が目標値を上回る数値を示していた。しかし、「都道府県の様子」と「くらしを支える水」に関しては、目標値に対して正答率が下回る結果であった。資料を読みとることそのものはできていても、日常生活との関連付けができなかったことが原因と思われる。

6年 おおまかな大問において、正答率が目標値を上回る数値を示していた。しかし、「日本の国土と人々のくらし」および「日本の農業」ならびに「日本の食料生産」の問題では、目標値を下回る結果であった。資料を読み取ることそのものはできていても、今問われている問いに対して何をどう答えるのかという考え方が定着していないことが原因と思われる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

4年 まず「資料を見て分かること（事実）」と「資料から言えること（考察）」を整理すること、次に「資料と資料を関連付けることで見えてくること」について、しっかりと考える習慣を身に付ける必要がある。そのために、個人で資料を読み取って事実と考察を書かせたり、ペアやグループで資料について議論させたりして、資料を多面的かつ深く読み取れるようにする。

5年 資料の読み方に慣れるところから始める必要がある。資料を見る「観点」を指導し、そこから「資料を見て分かること（事実）」と「資料から言えること（考察）」を整理することが必要である。そのために、資料を読む際に事実と考察を分けてノートに書かせ、書いた内容をペアや学級全体で共有・吟味していく。

6年 資料を見る際に観点を問うなどして「その資料を読むポイント」に気付かせ、問いに対する答えを明確にしていく必要がある。そのために、ICT機器を活用して資料を拡大して見せたり、ペアやグループで資料についての議論を行ったりして、資料の読み方・答え方について力をつけていく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

4年 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。特に「くらしの移り変わり」の問題で目標値を上回ることを目指す。

5年 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。特に「くらしを支える水」の問題で目標値を上回ることを目指す。

6年 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
 教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	57.4	53.9	56.8	57.5	60.5	57.5	58.8	61.1	59.0
活用	47.8	50.5	48.8	50.5	57.1	51.0	45.0	53.3	44.9

2 具体的な課題とその要因

- 7年 活用問題において、「安土桃山時代、江戸時代」の選択問題が、目標値を下回った。近世の歴史に関する、基本的な知識が定着していないことや資料を正確に読み取り、複数の資料を結び付ける力が身につけていないことが原因と考える。
- 8年 活用問題において、「世界の姿をとらえる」の選択問題が、目標値を下回った。世界の地域構成を理解するための基本的な知識や地図を読み取る力が身に付いていないことが原因と考える。
- 9年 基礎問題において、「世界と比べた日本の地域的特色」の選択問題が、目標値の55.5に対し正答率が47.5と下回った。日本の地域ごとの特色を理解できていないことや資料を正確に読み取る力が身に付いていないことが原因と考える。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年 近世を学習する準備として習熟度確認テストを行う。生徒自身にも課題を伝え、中心となる人物同士を比較させるなどして基本的な内容を理解できるようにする。地図、グラフ、史料などの資料を読み取る活動を取り入れる。資料の内容から近世の出来事を読み取り記述する活動を増やし、丁寧に説明しながら、苦手な生徒でも自分自身の力で読み取れるようにする。
- 8年 方位・地図に関する復習問題を実施する。地図の種類によって読み取れるものが違うことを示しながら、基本的な知識が定着するようにする。日常的に地図、グラフ、表などの資料を読み取る問題に取り組みさせる。資料から読み取れることを記述させたり、資料のポイントを示したりしながら解説をすることで問題の解き方も身に付けていく。
- 9年 地図、グラフ、表などの資料を読み取る活動を取り入れる。資料から考えられることや分かったことなどを生徒一人一人が記述したり発表したりする活動を増やし、資料のポイントなどを示しながら、苦手な生徒でも自分自身の力で読み取れるようにする。学力調査のフォローアップ問題にも取り組み、問題の答え方にも慣れていく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年 校内の平均正答率が目標値を上回ることを目標とする。
- 8年 校内の平均正答率が基礎問題・活用問題ともに目標値を上回ることを目標とする。
- 9年 校内の平均正答率が目標値を5ポイント以上上回ることを目標とする。

1 定着状況についての概要

分類	2年			3年			4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	86.2	92.3	89.7	77.4	85.3	79.7	75.9	78.2	76.9	70.5	71.1	70.7	71.5	77.1	73.8
活用	57.5	65.3	58.5	59.3	70.8	60.5	53.8	64.4	55.6	55.0	59.2	55.0	53.8	64.7	53.8

2 具体的な課題とその要因

- 2年** 「とけい」の問題の正答率が82.6で、全国の正答率85.0を下回った。習熟が不足していたと考えられる。
- 3年** 「データの活用」領域の正答率が77.2で、よくできてはいるが、データの読み取りや考察にも力を入れる必要がある。
- 4年** 目標値と比較すると、「たし算・ひき算」は0.1、「かけ算」は2.6、「□を使った式」は2.2下回った。基本的な計算力と、場面を式に表す経験が不足していた。
- 5年** 「億と兆・がい数の表し方」は、目標値を7.1も下回った。位を正しく読む力、四捨五入する位を正しく選択する力が不足しているためと考えられる。また、「面積」は0.6下回り、面積の基本的な計算や正しい単位を選択といった問題の習熟が足りていなかった。
- 6年** よくできてはいるが、「立体と体積」の問題の正答率が76.6で、全国の正答率は78.2、区の正答率は81.6であった。単位に気を付けて答える意識が足りていなかったことが原因と考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年** 時刻を正しく表したり、時間を正しく計算したりできるよう、日常の中で意識させる。
- 3年** 「データの活用」がより正確に行えるよう、日頃から身近な統計資料について話題に出したり、データからどのようなことが言えるかを問いかけたりする指導を行う。
- 4年** 「たし算・ひき算」「かけ算」の筆算や文章問題の復習を授業や家庭学習に取り入れたり、「□を使った式」につながるよう立式の場面で根拠を説明させたりするなど、指導の工夫に努める。
- 5年** 正確にわり算の計算ができるようにすることと、概数にする際にどの位を四捨五入するかを正確に選べるようにすることが必要である。そのために、計算の練習を多く取り入れたり、まずは概算で答えを求めることで計算ミスに気付けるようにしたりする。四捨五入する位については、問題文を正しく読み取るよう促す。
- 6年** 問題をただ解くだけでなく、単位を意識させるために、「この図形は、実際にはどのような大きさか」といった量感を育てる指導を心がけ、数的な処理にとどまらず実際のイメージが湧くようにしていく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年** 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
- 3年** 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
- 4年** 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
- 5年** 全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
- 6年** 全ての領域・問題内容、特に活用の正答率が目標値を上回ることを目指す。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【数学】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	71.4	76.6	71.8	63.3	67.4	62.7	59.8	60.8	59.9
活用	55.7	59.6	53.9	47.1	52.5	44.7	40.7	38.5	36.9

2 具体的な課題とその要因

7年 どの分野に関しても全国平均・目標値を上回っているが、全国的にも正答率の低い「単位量あたりの大きさ」の分野に関しては本校でも正答率が低くなっている。(全国平均は30.8%) また、「百分率」にもやや正答率の低下がみられることから、単位と実際の量的関係や割合に関する理解が十分に深まっていないと考えられる。

8年 「比例式」、「反比例」について、全国平均を下回っている。比例式については、内項の積と外項の積が等しいという性質を使えていない。計算の練習が不足していると考えられる。反比例については、反比例の関係を式で表すことができていない。比例と反比例の区別がついていないと考えられる。

9年 「関数」についての領域の正答率が37.8%と低く、目標値と比較しても7.2%下回っている。特に関数の記述する問題については、正答率が19.2%と極めて低く、目標値と比較すると10.8%下回っている。一次関数についての基礎的な知識が身に付いていないということの原因として考える。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 授業内において、グループでの実験等を通して理解を深めたり、復習できる機会を積極的に設けたりして、既習の算数科（前期課程）での学習内容と数学科（後期課程）での学習内容の系統性を意識した授業を展開していく。

8年 「比例式」については、長期休業等で復習に取り組み、小テスト等で定着状況の確認をする。「反比例」については、「一次関数」の導入で、2つの数量関係の変化や対応を調べる活動を重視する。「比例」・「反比例」・「一次関数」の特徴や違いについて理解を促す。

9年 関数については、7年で比例・反比例、8年で一次関数、9年で2乗に比例する関数を行う。2乗に比例する関数の理解を深めるために、その単元の導入で比例・反比例、一次関数の復習を入念に行い、既習事項を固めることが必要である。

4 次年度の数値目標（成果指標）

7年 今年度と同様に、後期課程の授業内においても、前期課程の内容を振り返る機会をしっかりと設け、すべての分野で全国平均や目標値を上回るように指導をしていく。

8年 引き続きすべての分野で全国平均や目標値を上回るように指導をしていく。また、苦手となりがちな分野に関する正答率の向上に向け指導していく。

9年 関数・数と式の領域で、正答率が目標値を上回るように指導していく。

全体では、「基礎」「活用」共に、正答率が目標値を5.0ポイント以上上回れるように指導していく。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分類	4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	72.9	68.2	77.0	68.8	63.2	72.9	70.0	68.5	72.0
活用	50.6	45.4	50.0	54.5	54.2	58.2	51.1	59.8	52.2

2 具体的な課題とその要因

4年 領域別の正答率を見ると、「物質・エネルギー」「生命・地球」とともに目標値、全国平均を下回った。分野別に見ると「電気の通り道」「物の重さ」以外の項目で下回った。

5年 領域別の正答率を見ると、「物質・エネルギー」「生命・地球」とともに目標値、全国平均を下回った。分野別に見ると「動物の様子」「電気のはたらき」「月と星」「物の体積と力」「水のすがた」「雨水のゆくえと地面の様子」の項目で下回った。

6年 領域別の正答率を見ると、「物質・エネルギー」では、目標値、全国平均を上回った。「生命・地球」では、目標値を上回ったが、全国平均より下回った。分野別に見ると「天気の変化」「植物の花のつくりと実」「人のたんじょう」「電流のはたらき」「けんび鏡の使い方」で下回った。

前期課程理科の全体の傾向として、豆電球や乾電池、流水の実験など具体物を操作するものの正答率が高く、宇宙に関することや人体や花の仕組みなど中身が見えにくく抽象的な学習が多くなる領域で正答率が低いことが分かった。要因としては、各領域の基本的な知識が身に付いていないことが要因として考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

学年を問わず、各領域の基本的な知識の定着を行う。3年生に関しても、次年度の学力調査に向けて、同じように取り組む。指導者が、身に付けさせなければならない事象を明確にする。授業展開においては、問題解決型のプロセスを大切にしながらも、「まとめ（結論）」をきちんと行い、知識を定着させる。カラーテスト、定期考査に加えて、教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識が身に付いたかの評価を行う。その結果をもとに授業内で復習を行ったり、課題を出したりする。

学習内容、発達段階に応じて、外部機関の活用を検討する。国立科学博物館のオンラインプログラムやプラネタリウム鑑賞、NHK for schoolの動画資料を活用する。

・各学年の取組指標

4年 「物質・エネルギー」領域に重点を置く。特に「光と音の性質」については、「光は集めたり、反射させたりすることができること」や「音は振動によって成り立っていること」について、具体物を用いた実験を通して理解させる。「磁石の性質」については、磁石を用いた操作を通して、同極と異極があることに気付かせるとともに、事象の仕組みを確実に理解させる。単元の学習後、動画資料や教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識を定着させる。

5年 今年度、正答率が低かった「金属、水、空気と温度」に重点を置く。物質の変化について、実験や動画資料を通して、理解させる。教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識を定着させる。

6年 今年度、昨年度と正答率が低かった「人の誕生」「顕微鏡の使い方」に重点を置き、動画資料や教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識を定着させる。「顕微鏡の使い方」については、具体物の操作をもとに理解させる。

4 次年度の数値目標（成果指標）

4年 「物質・エネルギー」および「基礎」の目標値を上回る正答率を目指す。

5年 「物質・エネルギー」および「基礎」の目標値を上回る正答率を目指す。

6年 「基礎」の目標値を上回る正答率を目指す。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	60.0	63.1	59.2	55.2	49.4	52.8	60.0	55.2	60.3
活用	53.3	57.7	51.6	49.5	53.2	50.0	51.0	46.6	52.5

2 具体的な課題とその要因

7年 観点別正答率については「知識・技能」の目標値 58.2 に対し正答率 58.5、「思考・判断・表現」の目標値 58.3 に対し正答率 63.9、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 53.3 に対し正答率 64.6 であった。「知識・技能」の学習内容の定着が課題となる。「主体的に学習に取り組む態度」はあるので、学習意欲に繋げる工夫が必要であると考えられる。

8年 他の項目と比べて極端に低かったものが「気体の性質」であった。コロナ禍の中で教科書通りの実験ができなかったためと考えられる。ICTを活用した動画での学習で補ったが、やはり実際に実験をおこなうことの必要を感じる。ガスバーナー等、理科室で行わざるを得ない実験の工夫を考えていきたい。

9年 「化学変化」「電流と磁界」の単元の正答率が低かった。定期考査ではそれほど低くはなかったのので、教科書通りの学習の理解はできていると思われる。やや暗記として取り組みがちであり、例えば教科書とは異なる図や応用といったものへの活用力が定着していない。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行っていく。また、実生活と学習内容との関わりとを気付かせ、興味をもたせながら学習内容の定着を図っていく。

8年 授業で観察、実験を多く取り入れていく。すべてを行うことができなくても、大切な部分だけでも行うなどの工夫を図り、確実なイメージをもたせ、学習の定着につなげていく。

9年 再度7年、8年の復習を行い、様々なパターンの問題に取り組みさせていく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

7年 「基礎」は目標値以上、「活用」は目標値の3%以上を目標とする。

8年 「基礎」「活用」共に目標値の5%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

9年 「基礎」「活用」共に目標値の5%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

各問題についての正答率は、目標値と比較して、－5ポイント未満の評価の問題はなかった。

2 具体的な課題とその要因

6年 全体的に見ると、聞き取りよりも書き取りにおいて課題が見られる。書き取りの中でも、英文の完成や英作文において目標値よりも校内正答率が低い傾向が見られる。話すこと、聞くことが中心で、英文の完成や英作文といった問題に慣れていないことが正答率の低い要因として考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

6年 英文の完成の問題を、英語の簡単な文法や用法に偏らない方に配慮しながら、児童が日本語と英語との語順等の違いや、関連のある分野文構造のまとまりを認識できるよう、指導を工夫する。

4 次年度の数値目標（成果指標）

6年 全ての領域で、校内正答率が目標値や全国の正答率を上回るようにする。無回答が5パーセント程度いたので、無回答を減らす。

令和3年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	76.1	82.5	79.1	61.0	70.5	60.2	67.5	74.6	67.8
活用	83.1	86.4	85.5	49.2	55.3	44.5	55.0	61.5	54.8

2 具体的な課題とその要因

7年 「日常会話の理解（聞く）」の正答率が70%を下回っていた。小学校段階ではALTと個別に会話をする機会が少なかったり、リスニング形式のテストに慣れていなかったりすることが原因であると考えられる。また、既出の文法や単語を理解しておらず会話内容を聞き取れないことも原因と考えられる。

8年 活用問題において「読むこと」の領域の「長文の読み取り」、「書くこと」の領域の「場面に応じて書く英作文」、「情報に基づいて書く英作文」、の正答率が50.0を下回っていた。基本的な単語や文法事項などを完全に理解していないため、一つ一つの段落に書かれている要旨を読み解くことができていなかったり、書きたいことを場面に応じて書けていなかったりすることが原因と考える。

9年 活用問題において「対話の内容を聞き取り、資料をもとに英語で答える」問題の正答率が目標値30.0に対し25.7、「対話の流れに合った英文を書くことができる」問題の正答率が目標値30.0に対し、11.4と下回った。また、どちらの問題も無回答が20%以上であったことから、資料の正しい読み取り方と状況に応じて適切な表現を活用することに習熟していないことが原因と考える。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 「聞くこと」への指導として、教科書のリスニングの機会を設ける。その際、内容理解問題も出題する。また、ALTとの“1 minute talk”を通して日常的に使用する表現を習得させる。単語や文法に関しては、板書やスライドを使ってインプットさせ、問題演習でその内容を定着させる活動を続けていく。

8年 「読むこと」への指導として、説明文、手紙や物語などのまとまりのある文章を読み、そのあらすじを読み取る活動を増やしていく。またその際に、段落のつながりや、分からない部分を推測して読み進めることなどを説明し、教科書や他の教材を数多く読ませることが必要である。

また「書くこと」に対しては、語と語のつながりや文法などの特定の言語材料を意識して文を書かせるだけでなく、場面や、状況を設定して書く活動を増やす。生徒同士で内容を伝えあうなど、第三者が読んで伝わるように書き、伝える活動もしていく必要がある。

9年 資料の読み取りについては、新聞記事など様々な形式の文章を読む活動を取り入れる。グラフや資料などから正しい情報を読み取り、その上で自分の気持ちや考えを表現し合うペアワーク・グループワークへ発展していく。状況に応じた表現活動については授業内でTeacher Talkを積極的に行い、生徒一教師のやり取りの中から生徒が適した表現を活用できるように促していく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

7年 聞くことについて、すべての項目で70.0を上回るように指導していく。

8年 まとまった英文を読んで段落ごとに内容を把握したり、語と語に注意しながら英作文書いたりする問題で、次年度は50.0%を上回るように指導していく。

9年 資料問題、状況に応じた英作文で、無回答10%以下、正答率30.0%を上回るように指導していく。